



一昨年、確か11月頃だったと記憶しておりますが、新型コロナウイルスが中国で発生したことを伝えるニュースが、小さく報道されました。当時の私の感想としては、「またSARS（サーズ）のように広がらないかが…」程度の認識でした。それが今や、新型コロナウイルス感染症として全世界に拡大し、パンデミックとも言われるほどになってしまいました。不安な日々が続きますが、人類の歴史は、感染症との闘いの歴史でもあります。その歴史を捉え直すことで、現代の我々にも通用する教訓が得られるかもしれません。この機会に少し人類と感染症の歴史を振り返ってみましょう。

～感染症と人の歴史～

世界の歴史をひもといてみると、人類は太古から数々の病気・感染症と闘ってきました。有名などころでは、ペストや天然痘、コレラやスペイン風邪、マラリアなどが挙げられます（あるいは梅毒などの性感染症も含めるべきかもしれません）。14世紀にヨーロッパで急拡大したペストは、「黒死病」とも呼ばれ、当時のヨーロッパ人口の、実に1/3が死亡したとも言われます。また第一次世界大戦末期に流行したスペイン風邪は瞬く間に各国に広がり、戦闘行為そのものを困難にさせました（第一次大戦終結の直接的要因とする学者もいます）。

これらの感染症は、人の移動すなわち、活発な人流の増加によって世界に広がって行きました。その契機となったのは、例えば11世紀末から200年に渡る十字軍の遠征や、16世紀以降の大航海時代、近現代においては列強の植民地支配や世界大戦、あるいは国際貿易の進展などです。さらに、一度は克服したかに見えた感染症が、ウイルスの変異や耐性菌の登場によって再び猛威を振るうことも珍しくありませんでした（歴史的に人類が根絶に成功した感染症は、天然痘のみと言われています）。

これらの病気に対して、祈祷やまじないなど（つまりは「思い込み」）のたぐいが、全く無力であったことは、みなさんもお存知の通りです（一部地域では古い因習が続いているところもありますが）。人類は叡智を結集し、飽くなき努力と研究により積み上げた科学の力で立ち向かってきたのです。

一方で、無知や不安、誤った情報に踊らされた人々が、他者を迫害してきた側面があることも否めません。ペスト流行下のヨーロッパでは、各地でユダヤ人に対する憎悪が燃え上がり、多くのユダヤ人が弾圧・迫害されました。感染症に限らず、国内でも原爆の被爆後遺症に苦しむ人々や、ハンセン病患者に対する迫害・排除の動きなど（行政も一体となって行われたことは忘れてはなりません）、病気に苦しむ人々を、さらに偏見や差別が苦しめてきたのです。というより、潜在的にあった差別感情や意識が、感染症や病気という不安のなかで表に出てくると言ったほうが正確かも知れません。

コロナ禍においても、同様な傾向が見られます。感染者もしくはその周囲の人々に対する有形無形の攻撃が、「正しさ」という仮面をかぶって広がっています。それは、もともとその人が持っていた差別意識の表れかもしれません。繰り返しになりますが、感染症という世界的課題に立ち向かう武器は、広い意味での科学の力、すなわち正しい知識と理解です（科学者のみに限った話ではありません）。勝手な想像や憶測もまた、科学的とは言えません。現代に生きる我々が、コロナという未知の病気に対して、どのような姿勢で向き合うべきなのか、まさに今問われているのです。